

---

# 影法師

数原琢彌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

影法師

### 【Nコード】

N5237G

### 【作者名】

数原琢彌

### 【あらすじ】

平凡、凡人な高校生八神陽一には一つ悩みがあったそれは人には見えない（何か）が見えてしまうこと。彼の平凡な高校生活は唐突に終わりを告げる。長い異形との闘いの幕開けだった。

## プロローグ（前書き）

下手なりに書いてみました。何とか完結できるようがんばります。  
ぜひ読んでください。

## プロローグ

……起こったこと自体は、  
きつと簡単な物語なのだろう。傍目にはひどく混乱して、  
道筋がないように見えても、  
実際は実に単純な、小さな物語にすぎないのだろう。

でも、僕の立場からはその全貌は見えることはない。物語の登場  
人物は、自分の役割の外側を知ることができないのだ。

今、僕はとてつもない奇妙な出来事にまきこまれ冷たいアスファ  
ルトの上にぺたりと座り込んでいる。

何故か？

答えは簡単。

僕の目の前で一匹の黒い化け物と白いコートを一人の少女が互  
いを睨みながら対峙しているからだ。

自分の怯える思考の中、僕は思った。

…どうしてこんなことになったんだ？

語るには数時間前に遡る…

僕は、通っている高校の部室で一人黙々と文集をまとめる作業を  
続けていた。

「ふう…もう、こんな時間」

校舎の三階にある文芸部の部室から、西に傾いた秋の日差しに照らされた街並みをながめながら、僕は、作業を止めてそう呟いていた。

室内には誰もおらず、彼のいる一角だけに照明が点けられていた。そのため、周りの少しずつ暗闇に染まりつつあった。

「…時間だな、帰ろう」

彼は作業を止めて、帰り支度を始めた。その間にも、闇は深まりを強めていた。

支度を終え、彼がバックを手携え、照明を消し、部屋を出ようとしたとき。

ピタリと彼は動きを止めた。そして、後ろを振り返り、周りを見渡すと、それはいた。闇の中で動く黒い物体が…。

しかし、彼は別段、驚きもせずそれを無視して部屋を後にした。

僕の名前は八神陽一。

公立の高校に通うごく平凡な学生だ。顔も月並み、とりえもあまりない僕だが、そんな自分にも一つ悩みがある。

高校生にもなるんだから悩みの一つ二つはあるのは当たり前なのだが、僕の悩みは人に言えるような代物ではない。

僕の悩み…

それは暗闇の中で蠢く「何か」が見えること。

初めて見たのは中学生になったころ、友達も見えないし最初は錯覚だと思っていた。でも、夜が深まり、闇が周りを包むとそういったのはまた見えてくる。黒いスライムのような姿をした彼らはいっ

も闇の中をうろつくと動いている。自分だけが見えるということに対して怖いと思う気持ちはあったけど、しばらく観察して、彼らが僕や人間に危害を加えないことがわかった。

高校に入る頃にはもう見えることに慣れてしまい、夜、彼らを見てももう何の関心も抱かなくなっていた。

…そう、彼女と出会うまでは、

僕は学校をでると一人、夜の街を自宅のある新興住宅地の方にゆつくりとした歩きで帰路についていた。

〔県北部にあるこの市は地方都市にしては急速な発展を遂げている場所だ。都心からの移住や大手企業の工場開発などがこの地に集中し、人口が急増したためだった。〕

その発展の代償なのか、道に人やゴミが溢れていた。その間を僕は器用にかわして歩いている。

いつもと変わらない風景、

その風景に混じる彼らは誰の目にも見えない。しかし、確実に存在していた。

僕にしか見えない影のような生き物。チラチラと裏路地の影に見える彼らを見ていると、僕はあることに気づいた。

（…なんか、いつもより多い気がするな？）

昨日に比べて、心なしか見える彼らの量が増えている。それにいつもはゆつくりと動く彼らが今日に限って、妙にせわしく動いているように見えた。

（…奇妙だ。さっさと帰ろう）

僕は足を早めた。

陽一が住んでいる新興住宅地は市外周部の谷を切り崩して作られたものだった。そのため、家が階段状に連なっていた。

彼は住宅地の路地を一人歩いていた。

「…やっぱ、おかしい」

呟いて、彼は周りの暗闇を見渡していた。いつもこの辺にもいる彼らがどこにもいない。気配すら感じられなかった。

「どうなっているんだ？」

陽一が足を止めて周りを見回しているのをそれは見ていた。黒いそれは彼を餌と認識したのかゆつくりと口らしきものを開き、黒いねつとりとした液体をアスファルトに滲ませた。

そして彼が無防備な背後をこちらに向けたのを見て、

刹那、それは襲いかかった。

狙うは首筋、人間の弱い部分

僕は一瞬、背筋がゾクツとするような感じに襲われた。

それに直感的に反応して動けたのは奇跡のようなものだった。横に飛んだと同時に右後方から何かが飛びかかってきていた。

着地したそれを僕は初めて見た時、驚きを隠せなかった。

最初、黒い野犬だと思った。しかし、それには目はおるか、鼻、耳さえなかった。形だけは犬型…その全てが黒に染まっていた。

「な、何だ！？こいつ！？」

立ち上がりながら、僕はそいつを見て、叫んでいた。

そいつは、犬のように唸ったりせせず口をニヤリと笑ったように開き、こちらを見ていた。

「く、くるな！化け物！」

僕は工事現場で使い捨てられたものか足元に落ちていた錆びた鉄の

棒を震える手に取り、化け物に構えた。化け物はそんな行動をあざ笑うかのように再び飛びかかってくる。口を通常ではありえないほど大きく開けて、一息で彼を食べようとしているかのように

「う、うわあああ！」

がむしゃらに鉄棒を振り回し、偶然にもその一振りが化け物に命中した。

「！？」

しかし、普通なら手応えがあるはずの腕には何の反応も伝わっていない。当たったはず…と鉄棒を見る。

「ひっ！？」

確かに鉄棒は化け物に命中していた。…現にまだそこにいたのだから。化け物は鉄棒に噛みついて…いや、融合していた。

まるで液体に差し込んだように体に刺さった鉄棒から波打っているのが見えた。

僕は鉄棒を落とし、地べたにぺたりと座り込んだ。化け物はきれいに着地すると鉄棒を黒く染め上げ、体に取り込んだ。

「……………」

最早僕は恐怖でくみ、声もでなかった。それを感じたのか化け物は再びニヤリと笑い、ゆっくりと近づいてくる。

それから逃れようと僕は必死に腕を動かし、後ずさる。

それでも獲物を追い詰めることをまるで楽しむようにゆっくりと近づいてくる。

背中に衝撃を受ける。壁にぶつかったのだ。もう、逃げられない。

僕のすぐ目の前にはそいつが黒いよだれのようなものを口からを一筋たらしめてた。

一瞬、間を置いて口を開き、そいつは僕に飛びかかる。

僕は思わず、目を閉じた。



……？……おかしい…何故、襲ってこないんだ？

僕はゆっくりと目を開けた。

広がった光景。

それは華奢としかいいようのない小さな肩の純白のコートを着た少女が僕を守るように黒い化け物と対峙している姿だった。

「……………君は？」

そんな僕の問いを無視して、少女は右手に持った何かを振り上げる。

僕には何かトランプのカードのような物に見えた。

そして、偶然なのかその瞬間彼女の周りに微風が吹き始めた。

「…無影。汝、我との契約の元姿を無から、我の剣と化し、我の力となりて姿を表せ」

彼女の鈴の鳴るような小さな弦きが、こだました瞬間、カードが青く光始め、微風が嵐となりて彼女を包み込んだ。

…でも、僕は見ていた。

彼女の持っていたカードが消え、その代わり手には黒い日本刀が現れていた。言葉のあやでなく刃先から柄にいたるまで全てが黒かった。

それを両手に構え、少女は化け物に刃先を向けた。化け物も僕より彼女を脅威と認識したのだろ。怯えたように間合いを遠ざけていく。しかし、それは無駄な行為であった。

刹那、少女は一瞬で間合いを詰めていた。

「ギ！？」

始めて化け物が声を出していた。始めて聞いたそいつの声は驚きに包まれたものだった。

「無の闇に還りなさい」

彼女は再び弦き、刀を振り下ろした。刀は袈裟切りに化け物を一刀両断していた。

「ギイイイ！」

そいつの悲鳴が周りに木霊した。そして次の瞬間、化け物は切られた部分から突然、溶け出し、血が地面いっぱいに広がるかのよう  
に形を失っていた。

戦いは一瞬で終わり、すでに化け物の姿が消えていた。周りには  
秋の夜の肌寒い風が流れ、一瞬の静寂が流れる。

「……………生きてるか？」

一瞬、僕は誰が話しかけてきたのかわからなかった。しかしすぐ  
に助けてくれた少女からだと思が認識する。

「…あ、はい」

僕は立ち上がり、彼女を見た。しかし、彼女は後ろを向いたままこ  
ちらを見ていない。

すでに手に刀はなく、雲が晴れた月夜の光に照らされた銀色の長  
い髪が小さく夜風で揺れている。

「…あの、ありがとうございます。その、助けてくれて」

彼女の背にそう言葉を告げると、彼女はゆっくりこちらを振り向く。  
綺麗な人だった。

まだ少し幼さが残る人形のように整った顔。陶器を思わせるほどの  
白い肌。そして、宝石のような透き通ったルビーのような赤い瞳が  
印象的だった。

「礼はいい。役目を果たしただけだから」

彼女は淡々と答える。

役目…？…どういうことだ？

…でも、あの化け物のや僕が見る影のこと知ってるのかも。

「あの化け物は…」

何なんですか、と言おうと口を開いた瞬間。額が柔らかな感触に包  
まれた。それは彼女の手だった。包まれた瞬間、急に眠くなってい  
た。

「…大丈夫。化け物の記憶はすぐに消える。明日からも君の日常は変わらない」

僕の意識が途絶える。最後に見たのは夜に浮かぶ月の前にいる彼女の微笑だった。

…僕が目を覚ました時、夜は明け、彼女の姿はもうどこにもなかった。

いつのまにか僕は公園のベンチで眠っていた。

…夢だったのか？

…でも、あれが夢？

体を起きあがらせ、考えようとした時、体の上にかけられた何かが音を立てて、落ちた。

それは、彼女の着ていた純白のコートだった。

「夢…じゃない」

僕はコートを手に取り、空を見上げた。まだ薄く月が見えていた。

「彼女はいつたい？」

そう僕は呟いた。

そんな僕を上がりかけの太陽が照らしていた。

**第1話：平凡は唐突に過ぎ去りて（前書き）**

少し微妙な作りになってしまいました。

## 第1話：平凡は唐突に過ぎ去りて

「…………ハア」

あの出来事から数日が立ち、僕は彼女の言った通り、平凡な学生生活を送っていた。

テレビや新聞を見ても、あの影の化け物のことは何一つ書かれていない。あるのは僕の記憶の中だけ。

「夢だったのかな？」

そう呟き、僕は窓から空を見上げる。晴れやかな青空が広がっていた。

…いや、あれは夢じゃない。

家に保管しているあのコートが証拠じゃないか。

「…神、」

あの女の子、何者何だろう？

「……八神」

…もう一度、またあの戦いの現場に行ってみるしかないのかも…彼女との繋がりはあそこしかない

「八神！！」

物思いにふけっていた僕にとってそれは耳元で炸裂した爆弾のような衝撃だった。脳が揺れ、一瞬思考停止に陥った。

「…っ！は、はい！」

思考が回復すると同時に僕は立ち上がり、横で睨みをきかせている銀縁眼鏡をかけた古典の先生がいた。

「…授業中に考えごとか？」

その声は、小さいが脅しをかけているようなひどく低いように聞こえた。

「すみません！」

こういう時は素直に謝るのが上策と判断した僕は頭を下げる。「…」

ページ162から、三行目」

素直に謝ったのが功を制したのか、先生はため息をついて、読め、とページを指定する。

「はい！」

僕はページを開き、古典の長ったらしい言葉をかたごとで読み始めた。

全ての授業が終了し、その終わりを告げる鐘がなると、皆それぞれ席を立ち、帰宅の準備を始める。僕も目的の場所に行くため、手早く荷物をまとめていく「なあ八神、一緒にゲーセン行かねー？」  
教室をでようとした時、比較的仲のよい友人に誘われた。

「ごめん、ちよつと用事があるんだ」

「ああ、そうなのか。じゃあ今度誘うときは付き合えよ」

「ああ、じゃあ」

学校を出た僕はすぐに、彼女と出会ったあの場所にむかう。

会えるかもという根拠のない期待に急かされていたのかいつもより足取りは早かった。

知りたかった。

僕にしか見えないと思っていた影のこと。あの化け物のこと。…そして彼女のこと。

暗く寒い夜の中、何故彼女は一人化け物と戦っていたのか。

その全てを知りたかった。

少し、息を切らせながら、僕はあの場所に立っていた。  
まだ明るいそこは戦いがあったようには見えなかった。

あの化け物が流した黒い血。僕が手にしていたあのひしゃげた鉄の棒。何もなかった。すべてが日常。非日常のかけらさえなかった。

「……やっぱり、そんな簡単じゃないよな」  
少し期待を裏切られたような気がしてならず、僕は大きく溜め息をついた。

「……………ん？」  
うつむき、途方にくれていた僕の足元に光る何か平べったいものがいつのまにかそこにはあった。

あれ、さっきは何もなかったはずなのに。  
そう思いながら、僕はそれを拾い上げる。銀色に光るIDカードのようなものに見えた。

「これは、いったい？」  
僕は首を傾げながら、それを見る。何かはわからない。…でも不思議と彼女の共通点のように思えてしまった。

「…兄さんならこれが何かわかるかもしれないな」  
ふと、呟くと僕はそれを胸ポケットに入れ、住宅街に走り出した。

目的の場所へはすぐについた。住宅街にひっそりと佇む一軒家僕と兄さんが一緒に住んでいる家だ。

僕はおもむろに鍵を使ってドアを開け、目的の部屋に向かう。一般的な一軒家、その内部に存在する異質とも言える一角。ケーブルが蛸足のように大量に伸びたドアの前には

（仕事場 勝手に入るな）

と書かれたA4サイズの紙が張り出されていた。

僕はそのドアを普通の倍以上の力でノックした。

数秒後、ゆっくりとそれは開き中から少し疲れた感じのボサ髪青年がのっそりと現れた。

「あ、兄さん。ただいま」

いつもしているように挨拶すると、青年はクマのできた目を僕に向ける。

「……お帰り」

疲れた声で青年は返す。

「仕事中だった？」

「……いんや、寝てた」

大あくびをしながら、そういうと青年は入れば、と言う感じで手招きする。

部屋はドアの外以上に蛸足ケーブルが床に散らばり、奥にある市販にはまったく見えない超大型のコンピューターに繋がっていた。その周りには空のスナック袋や缶コーヒーが散らばり、ケーブルから逃れたはずの僅かな床を見えなくしていた。



僕はその部屋の唯一くつろげるスペースであるソファ―ベッドに腰掛ける。兄さんが寝ていたためだろう。まだ少し暖かった。

「寝ているところごめん」

「……別にいいさ、仕事が終わったから仮眠してただけだからな」  
そう言いながら、僕にゴミの山と思っていた中から2つ缶コーヒーを取り出し、一つを僕に渡す。

「…少しは片づけようよ」

「嫌だ。この状態だから何がどこにあるか把握できるんだ。片づけなんかしたら仕事できなくなる」

自分の缶コーヒーを一気に飲み干しながらだるそうに応え、空になった缶を適当に投げる。

そんな兄さんの行動に僕は諦めたようにため息をつく。

「んで、何か用か？」

「あ、うん」

本題を切り出す兄さんにさっき拾ったカードを渡し、僕も缶に口をつける。コーヒーの甘さが口全体に広がっていく。

「こいつは？」

手のひらで遊ぶようにしながら調べる兄さんに答える。

「拾った。兄さんならさ、何なのかわかると思って」

「ふん」

兄さんは興味なさそうな視線をカードの裏を見る。

「ん？これは… I c u b e社のだな」

「I c u b e？」

わからない単語に聞き返す。

「知らん？今結構業績伸びてる新興企業。目下株価急激に値上がってる会社」

そう言われても余りわからなかった。

ちなみに兄さんの職業はプログラマー兼デイトレーダー。だからそんな一般人には知らない情報を知っていても不思議ではない。

「確か都市の中央に支社があつたはずだが」

「支社？」

「多分出所はそこだからそっちに送つとくぞ」

「あ、いや。僕が持つていくからいいよ」

「ん？どうしてだ？知らない奴の持ち物なんだから別に直接行かなくてもいいだろ？」

兄さんの言っていることは正解だろう。知人でもない人間に自分が骨を折る理由はない。

……でも、

「ちょっと、中央に行く用事があるから、ついで」

嘘をついた。用事なんてない。…だけど、このカードが彼女と僕を繋ぐ唯一の接点に思えて仕方がなかった。

確証は無いけど、そう思えてしまうから。

「……そうか」

納得したのかそうでないのか兄さんはカードを僕に投げた。  
慌ててそれをキャッチする。

「それなら、ほら、これが会社の住所」

メモ帳にペンを走らせ、書き終わるとその紙切れも投げ渡す。

「余り遅くなるなよ」

そう言つて兄さんは僕をソファアベットから無理やり退け、横にあった雑誌を顔に乗せて眠りに入る。いつもの癖だった。

「……ありがとう、兄さん」

照れくさそうに行け、と手を振る兄さんを後に僕は部屋をでて、一旦、自室に入る。そこにはあの純白のコートが丁寧にかけられていた。

その輝きはあの夜とまったく変わらない。

僕はそのコートを手に取り、Icube支社に向かった。

僕が支社に着く頃には、日も既に暮れていた。

仕事を終えたばかりのサラリーマン達が溢れかえるそこに、学生服に身を包む僕は否応なく浮いた存在だった。

「……ここだね」

僕が見上げるそこには周りのものより一回りも高いビルがあった。

「支社、だよな。なのにこの大きさ」

一体どんな大企業なんだと内心思いながら、僕は意を決して足を踏み入れる。

入り口はそのビルにふさわしく広くすっきりした空間に形成されていた。その中に設置されたセキュリティ機材と屈強そうな警備員が各々の仕事をこなしていた。

珍しそうに辺りを見回していると、その警備員の一人と目が合った。慌てて目を逸らしたがその行動が不審に見えたのか、近づいてきた。

（うわぁ……やばいかも！）

それもそうだ。こんな時間帯に学生服を来た少年がこんな場所をうろついていたら不審に思わないほうがおかしいだろう。

「ちょっと君？こんな場所で何をしているのかな？」

比較的丁寧に話しかけてきたがその声には明らかに警戒の色が聞いて見える。

「あ、あの…ですね」

情けないほどろたえる僕。

（ああ…どうして僕は！）

そんな僕にさらに不審に思ったのか、警備員は眉を潜める。

「とりあえず、こっちに来てもらおうか」

否応なし腕を掴まれた。

「あ……ちょっと！」

強く引つ張られたせいで、つんのめって前方に姿勢を崩してしまった。

その時、偶然ポケットから例のカードが音を立てて落ちた。

「ん？これはひょっとして」

腕を放し、カードを拾う警備員

「なんだ。君が新入りだったのか」

何を言っているのかわからなかった。新入りってどういうことなんだ？

「それなら早く言ってくれば良かったのに」

笑いながら、カードをぼくに返す。

「それじゃあ、あそこのエレベーターに乗ってくれ」

有無も言わせない内に僕は警備員詰め所の横にある明らかに一般者用ではないエレベーターに乗せられる。

どうなってるんだ？

僕はただカードを届けに来ただけなのに。

そんなことを考えていたが、

結論を出ないままエレベーターは到着する。到着の合図が鳴り、扉が開く。開いた瞬間、機械の作動音や人の慌ただしい声が聞こえてくる。

そこは白で全てを統一し、何か知らないが大量の機器があちこちから明滅している。ふと見ると隅に設置された椅子やテーブル、花を飾る花瓶まで白。

機器の一つ一つにはスーツをきた人間が頻繁に通信やキーボードで何かを打ち込んでいる。

僕はおずおずとエレベーターから下り、エントランスホールを中心に歩き出す。

静まり返ったエントランスに僕の革靴の音が嫌なくらい響く。

「やつとご到着か！」

突然横手から声を掛けられ、驚きながらもそちらに視線を向ける。

まだ若いスーツ姿の青年が立っていた。切れ長の目にメガネをかけ、短く切られた茶髪が印象的な人だった。

「あ、あの……」

「残念だが、紹介は後だ。すぐに現場に急行してくれ。日井鷲君」

「日井鷲って……あ、ちょっと！離してくれ！」

青年は半ば強制的に僕をどこかに引っ張っていく。

「状況だが現在、B産業区でやつらが発生している。先行したアルゼと谷津兄妹が支援部隊と共に迎撃しているが、数が多く手間取っている」

訳の分からないことを話しながら彼はさっきとは別のエレベーターに僕を押し込み、ボタンを押す。

「君には、彼らと合流して作戦地域の掃討に当たってもらおう」

「掃討って……ちょっと!？」

「突然だから混乱しているのはわかるし、訓練がほとんどで実戦経験がほとんどないのな、……だが、これ以上時間がかかれば商業区に被害が及ぶ」

少々の振動と共にエレベーターが止まり、扉が開く。

向かった先は屋上。

そこには黒色に塗装された明らかに民間用ではないごつごつしたヘリがあつた。

素人でもわかる。軍用ヘリだ。

「準備ができたか！」

彼が叫ぶとヘリの周りで装備を整えていた戦闘員と思わしき人間達の一人が答える。

「完了しています！すぐにでも出撃できます！」

「よし、出撃を許可する！発信用意！」

その一言に反応し、戦闘員は各々の武器を携え急いで搭乗していく。

「君も早く乗りなさい！」

「そんな身勝手な……勝手に僕をこんなところに連れてきて、……僕に何ができるといふんですか！？」

そう僕は叫んでしまった。

ただの学生に……一般人である僕に何をしろといふんだ！？

「君には奴らから人を守る力があるだろう！泣き言ならあとで幾らでも聞いてやる！今は行くんだ」

そう言いながら彼は僕をヘリに叩き込む。

「よし！発信させろ！！」

その一言に反応してパイロットはエンジンの回転数を上げる。すぐにヘリは浮き上がり、飛び立った。

「……新しい戦力の力、見せてくれ。日井鷺君」  
この彼の勘違いがこの先の僕の人生を大きく変えることになるとは  
誰にも知る由はなかった。



**第2話：少年は決意を持ちて修羅となる（前書き）**

つまらない物ですが、どうぞよろしくお願いします。

## 第2話：少年は決意を持ちて修羅となる

「どうして……どうしてこんなことに」

へりに乗せられた僕はとてもじゃないが冷静にはいられなかった。隅にうずくまり、頭を抱えて状況を把握しようしていた。かなり間抜けな格好だとわかっていたが、そんなことを気にする余裕なんてなかった。

「君、大丈夫かい？」

そんな僕を見かねたまだ若い戦闘員が話しかけてくる。

「……大丈夫なわけないだろ！急にこんなところに押し込まれて！？冷静でいるほうがおかしいよ！」

「落ち着くんのだ。いや、落ち着けるはずないが、とにかくこっちに座ってくれ」

優しくなだめてくれる声にほんの少しだけだが落ち着いていた僕は指示に従い開いていた簡易型の席に座る。

「こんな奴、……本当に使えるのか？」

別の隊員が先ほどなだめてくれた彼に話しかける。

「正直難しいだろうな。明らかに混乱している」

「……でもよ、使えなきゃ、俺たち全滅しまっぜ。俺らの武器じや奴らの足止めが精一杯なんだから」

その言葉に搭乗した隊員全てが反応する。

それと共に視線が僕に集まる。

「どうしろって言っただよ……僕に、何を期待するんだよ」  
頭を抱えて僕はうなだれる。

『まもなく、作戦地域に到着する。用意しろ』  
機内放送が流れ、隊員に緊張が走ると共に各々の銃器に弾丸を叩き込む。

「君は……これを持ちたまえ」  
そう言っただされたのは、装飾が施された鞘に入った一振りの日本刀だった。

「こ、これは、本物!？」  
渡された重みに感じながら、僕は聞き返す。

「当たり前だろう。君が用意してくれと言っただだろう?」

「僕は何も知らない!?こんなもの頼んだ覚えはないよ!」  
さらにうるたえる僕の様子に彼は何かに一抹の不安を感じた。

「まさか……君は、日井鷲……日井鷲 要君だよな?」

「違います!僕は、僕の名前は八神 陽一!人違いです!」  
その僕の一言にここにいた全ての人間が息を呑む。

「う、うそだろ!」

「パイロット!すぐに本部を呼び出せ!急……!」  
言いかけた瞬間、ヘリに大きな振動が走る。

『くそ!一体なんだ!エンジンが損傷した!!!』

同時に、機体が傾き、自分にかかる重力が強くなる。

『不時着する！！各員耐ショック用意』

慌てて隊員たちが自分の席に装着されたベルトで体を固定し始める。

自分も習って固定しようとしたが手が震えてうまくいかない。

「早く、早くしろよ僕！」

しかし、頭とは裏腹に手は言うことを聞かない。

ようやく固定できたのは、不時着する寸前だった。

その瞬間、機内全体が衝撃に包まれる。固定していたこと、そしてパイロットが正確に不時着することできる腕があつたのが幸いで投げ出されることはなかったが、衝撃で息ができなくなり、僕は気を失った。

(……………起きて……………)

誰かの呼び声が聞こえる。

誰なんだろうか……………

(私はあなたの似て非なる存在あなたに中に眠る力の封印を司る者)  
僕の力？

(あなたの力、それは……………)

その答えを待たず、急速に僕の意識は覚醒していく。

「……………い、おい！」

僕が目を開けると、そこには若い戦闘員の顔が見える。

「……あれ？……僕は一体」

「気が付いたか！よかった」

本当にほっとしたような彼が息をつく。

それもつかの間、外から銃声と悲鳴が聞こえてきた。

「やばいな、奴らがもう来たのか。君、立つんだ」

「……はい」

まだ頭がクラクラするが、僕はコートをしっかり片手に持ち、無理やり刀を杖代わりにして体を奮い起こす。

そこは産業区の大型道路だった。破損したヘリをバックに生き残った隊員達が銃撃を行い、爆音を辺りに振りまいている。

「撃て！撃ちまくれ！！」

隊長らしき戦闘員が他の隊員に叫びながら自分も両腕に抱えたサブマシンガンを掃射する。

「谷桐！奴らがくる！早くそいつを連れてアルゼ嬢に合流するんだ！！」

隊長は僕たちに気づくと、一瞥してそう叫ぶ。

「し、しかし！」

「馬鹿野郎！部外者を死なせるわけにはいかねえだろ！早く行け！」

先の見えない闇に銃撃の光を浴びせながら叫ぶ隊長に、谷桐と呼ばれた彼はすいません、と小さく呟き、僕に向き直る。

「こつちだ!! 急げ!」

走り出す彼に僕は慌てて付いていこうとする。

その瞬間、人の声とは思えない悲鳴が周りに響き渡る。

思わず、僕は振り向いてしまった。僕の目に入った光景、それは信じがたいものだった。

銃撃を行っていた隊長の体が半分以上を黒く染められていた。まるで、闇にすっぽりと喰われたように。

「う、ああ……」

隊長の悲鳴が徐々に小さくなっていき、体全体が消えていく。

片目しかなくなった顔。その目が恐怖に駆られながらもギョロリとこちらを見る。

「に、逃げる……!」

その一言を最後に、隊長の存在は消えた。残ったのは黒い球体の畏敬の存在。

それも一瞬、黒い球体はまるで粘土をこねるのかのように変形していく。

……あの日見た、犬型の化け物へと……

「うわあああ!!」

周りで応戦していた隊員たちが隊長の死にパニックを起こし始めた。銃を乱射するもの、武器を捨て、逃げようとしているもの様々だ。

「何してる！！早くこっちに！」

僕は恐怖に縛られながらも必死に体を動かし、走り出す。

産業区に静けさが戻った。

多分、みんなあいつにやられてしまったんだと地べたに座り息を整えながら考える。

ぼくがいる場所は産業区の中央にある自然公園の中にある噴水広場。そこまで僕たちは逃げてきた。

「救援信号を送った。すぐに仲間がくるから安心していい」

横で通信機を片手に何かの一段落がついたのか、僕に話しかけてきた。

「……そう」

「すまなかったな。知らなかったとはいえ巻き込んでしまったな」  
僕の横に立ち、彼は本当にすまなそうに謝ってくる。

「……いいよ」

そんな人間を責めるほど、僕は腐ってはいない。そう小さく返事をする。

「それより、あいつらはなんなんだよ……いつものちっちゃい奴ら

とは違うし」

それを聞いた彼は少し驚いているようだ。

「お前……見えるのか？」

「え？……ちっちゃい奴ら？」

「ああ、いつも影で動いている奴だ」

僕が頷くと、彼はそうか、と言いたため息をつく。

「まさか……君も適性者だったとはね」

「適性者？」

聞いたことのない単語だった。

「この際だ。話しておこう。適性者とはあいつらが見える人間のときさ」

「……僕以外にいたんだ。見える人」

「たくさんいる。俺もそう。でもその中でも君は傾向の比較的強い者のようだ」

「……どういうこと？」

「ならこちらから質問しよう。さっきの化け物とちっちゃい奴ら。どっちが見えやすい？」

変な質問だなと思いつつも答える。

「えっと……化け物だね。ちっちゃい奴らは何か、存在感薄いから」



「それが答えさ」  
え？と疑問に思う。

「あの化け物は結構見える人が多いんだ。普通の人でもね。気配とか自分で存在していることを表しちゃってるから。

でもちっちゃい奴らは自分から存在を消しているんだ。だから、普通の人には見えない。

あれを見ることが出来る人。それは希なんだよ。そんな人のことを俺らは適格者と呼んでいる」

「適格者……」

「ああ…そうだ。そして…」

そう言いかけた瞬間、

突然、周辺の空気が変わった。

間違いない。化け物がいる。

「……言い忘れていた。奴らのこと」

銃に弾をこめながら、彼は周りを警戒する。

それを無視するかのように、闇からゆっくりとした動作であの犬の化け物があらわれる。それを確認すると狙いを化け物に付ける。

「奴らが闇に生き、人の精神を喰らう化け物……。影族<sup>えいぞく</sup>という存在だ」

その刹那、化け物が彼に襲いかかる。

同時に、谷桐は構えた軽機関銃の引き金を引く。

耳に響く乾いた銃声と火花を散らしながら銃弾は化け物に向かう。普通の生き物ならこれで決着がついていただろう。

……しかし、相手は人間の想像を超える化け物だと改めて実感することになる。

撃ち出された銃弾は確かに化け物に命中する。しかし、やはり昨日の化け物のように 体に波を作るだけで効果は薄い。

「ギシャアアア！」

叫びと共に飛び上がり、その大きすぎる口で噛みつくこうとする  
「ぐっ！」

なんとかその攻撃を横に飛んでかわす。しかし反動で空中に飛び上がった機関銃が代わりに化け物に飲み込まれた。

それを平然と食事を探るように噛む化け物。

「う……」

「だ、大丈夫ですか!？」

横になりながら、呻く谷桐に思わず化け物を無視して近づく。よくみると革製の手袋ごと指が黒く染まっている。

「……逃げるんだ」

何とか手当しようと考えた矢先谷桐のその言葉にえ?と聞き返してしまふ。

「……もうこの近くまで仲間が来ているはずだ。足止めするから逃げるんだ……」

そう言いながらホルスターから拳銃を取り出す。

足止め？

奴らには銃弾は効かない。

……じゃあどうやって？

……自分の命を犠牲に？

隊長の闇に飲み込まれた光景が思い出される。……彼も？

僕の為に……死ぬの？

何かが胸の奥底から這い上がってくる。熱いものが……  
こころとは違う何かが……

僕のせいで……彼が死ぬ？

……そんなこと駄目だ！

……駄目だダメだ駄目だだめだ駄目だ駄目だダメだダメだ駄目だダメだ駄目だだめだ駄目だ！

……絶対、死なせない！

一つの決意を固め、ゆつくりとした動作で刀を鞘から抜く。

……思った以上に重い。

その重さを確かめるように握り直し、戦う覚悟を決める。

覚悟を決めた瞬間――

胸の奥に、響く何かを感じた。血が騒ぐ……

血管を通して、体中にチカラが漲る感覚。

（あたたかい……いや、あついくらいだ……）

僕は握りしめた重い得物を引きずるように下段に振り上げ化け物に走り出す。

痛みに一瞬氣をとられていた谷桐は民間人である彼の無謀とも言える行動を止められない。

「やめろ！死んじまうぞ」

唯一制止の声を上げるが、八神はそれに構わず刀を化け物につっこんでいく。

化け物はその行動に驚いているのかまたは余裕を見せて刀を体に取り込もうとしているのか、口をにやりと歪ませ八神を待ち構えている。

「うおおおお……」

彼の気合いの叫び声が響き化け物に向かって振り上げる。

肉を切り裂く音……が響く。

「ギ！？ギシャア！！」

新たに叫び声を上げたのは彼ではなかった。

鈍い音と共に化け物の前足の一本が地面に落ちる。

その瞬間、落ちた足が溶け黒い水たまりを作っていた。

俺は目を疑った。

奴らには銃は効かない。もちろん刀や打撃武器なら尚更だ。

だが、今彼はそんな奴らを

（斬った）のだ。信じられない。

化け物は痛みと怒りに体を震わせながら、後ずさる。

それに呼応するかのように彼も息を整えながら、下段に構えた刀を持ち直す。

その刀の刀身の色は……

（黒く）染まっていた。

### 第3話：さらなる覚醒

私は目を疑った。

指を蝕む傷の痛みを感じながらそれから目を離せない。

あの影族という化け物には、

私たちの使う兵器では傷一つつけられない。

にも関わらず、あの少年は渡された只の刀を使って奴に傷を負わせた。……それだけでも充分な衝撃だ。

しかし、それを上回る衝撃が私を包み込んでいる。

彼の持つ刀。

本来は直刃の金属色のはず。

しかし、今彼の持っている刀の色は……

彼らと同じ、漆黒の色に染まっている。

「既に、発現している人間だったのか？」

その呟きを発した直後、

再び彼が走り出す。

奇襲にも似た一撃を食らい、怯んだ化け物は本能に従い残った三本の足を使い、

器用にバランスを取りながら距離を取ろうとする。

しかし、距離を離す前に僕は走り出す。

(……僕には刀は使えない。只振り抜く!!)

走り出すと刀が地面と接触し火花を散らし、道筋を作る。

「倒れるおお!!」

気合いを込め、放った声と共に一気に腕に力を込め、刀を振り抜く。

風を切る音、

しかし先ほどのような手応えはない。え、と思った瞬間には僕は振り抜いた刀の反動に対応できず無様に尻餅をつく。

振り抜いた先にはバックステップでギリギリかわし、構える化け物の姿。

「!?!」

一瞬だけ思考が止まり、体が固まる。

「ギシヤアア!!」

叫び声と共に化け物が飛びかかってくる。

「くっ!!」

それを刀で受け止められたのは奇跡にちかいだろう。

しかし、体格的に細身である僕がその衝撃に耐えられるはずもなく、そのまま押し倒される。

背中に衝撃と痛みが走る。

それでも受け止めた刀で化け物の牙が僕を喰いちぎるのを防ぐことはやめない。

目の前には化け物の目も鼻もない黒の塊。それが僕を飲み込もうと唯一ある口を大きく開き、僕を飲み込もうともがく。

必死にそれを防ぐ。

だが、如何せん力に差がありすぎ、次第に化け物の牙が近づいてくる。

胸の奥で感じている力がなければとづくに力尽きている。

「く、くそ……」

この牙が自分に達すればどうなるかなんて考えたくない。恐怖と焦りが募る。

目を瞑り、歯を食いしばり必死に刀で押し戻そうとする。

（護ると決めたじゃないか……情けない、力があれば……力が欲しい。護る為の力が）

『力が……欲しい？』

「!？」

頭の中に声が響いた。

『もっと力が……欲しい？』

再び、同じ問いが響く。

「……ああ、欲しい」



僕は小さく呟く。

『後戻り……できないよ?』

心配するように問いかけてくる声。

……多分、その力を手に入れれば、もう僕は普通の、平凡平和な生活には戻れないということだろう。

僕のこれからを決める選択。

簡単には決められないし決めたくもない。……はずなのに。

……それなのに

……そのはずなのに僕は……

「構わない。こいつを……この化け物を倒せるなら、どんな代償でも払ってやる!」

そんな言葉が、自然に出ていた

『……わかった。あなたに……力を分けてあげる』  
その言葉を聞いた瞬間、

胸に先ほどとは桁違いの蠢動が僕を支配する。

それを感じた瞬間に僕は腕に力を込めて振り抜く。

刹那、先ほどの鏖迫り合いが嘘のように化け物が勢いよく前方に悲鳴をあげて吹っ飛んでいく

「な、に……？」

振り抜いた刀もそのままに、僕は驚きを隠せない。

確かに欲しいと願った。

その力がこれほどとは……

ゆつくりと立ち上がり視線を化け物に向ける。

飛んだ先にあつたビルの壁にぶつかりながらも、こちらを見てもがいている化け物。

その様子はどこか怯えているように見える。

先ほどのまでの熱さと焦りは消えていた。今あるのは力に対する驚きと冷静さ。

力によりさらに軽く感じる刀を見よう見まねに正眼に構え、切っ先を化け物に向けながら。

勢いよく走り出す。

風を切る音

視界の端がぶれていく。

すぐに化け物の目の前にたどり着く。驚きに固まる化け物。

この光景……どこかで

ふとなんの光景に似ているのか思い立つ。

（ああ……これは）

僕は正眼に構えた刀を一気に、化け物に突き刺した。

「ギシャアアア!？」

化け物の悲鳴、

傷から噴き出す黒い血。

(彼女と……会ったあの時の)

なにか舞台の役者の代役をやらされているみたい……と場違いな考えをしながら、

刀を勢いよく抜き放つ。

更に傷が深くなったことで、

自身を維持できなくなったのだろう。化け物は倒れ伏し、闇に溶けていった。

「な、なんてことだ……」

呆然とその圧倒的な力を間近で見ていた私は幸運なのか不幸なのか。

偶然に偶然が重なり乗り込んだ少年が発現者だった。

今現在、私達の組織にいる発現者は極僅かしかない。

影族に対抗できる唯一無二の存在である発現者。

それを偶然とはいえ会えたのは幸運と言えるだろう。

しかし、問題は……

圧倒的……圧倒的すぎる力

最初、彼は押されていた……

いや、最早奴らの餌食になる直前まで追いつめられていた。

私は何とか助け出そうと立ち上がり、走りだそうとした。

その時だった。

何かを呟いていた彼が

影族を刀で押し切り、吹き飛ばしたのは。

ゆっくりと立ち上がった彼の顔には先ほどの焦りはない。自身の力に驚いている表情。

そして、その後に現れた影族を見る表情は……

とても冷たいものだった。

その後は戦いとも言えない。

只の一撃……。

それで、……終わった。

影族を倒し、背を向けている彼に私は声をかける。

「や、八神君……君は……一体何者なんだ？」

絞り出すように私は呼びかける

それに反応することなく、

彼は前を見据えている。

「……谷桐さん」

呟くような声、そして彼は無造作に落ちていた白いコートを私に押

し付け、刀を構える。

「僕の後ろから離れずに、ついてきてください」

いきなりの意図がわからない要請。しかし、私はゆっくりと頷く。

今の彼に従えば助かる。何故かそんな考えが生まれていた。

「奴らに完璧に囲まれる前に突破をかけます」

そう言った瞬間、彼に飛び出してきた物体、造作もなくかわし、すれ違いざまに斬る。

「……ギ、ギ」

悲鳴を上げることなく倒れ、溶けていく影族。

しかし、闇の中に潜むモノたちの重なるように聞こえる唸り声が聞こえてくる。

「……影族がこんなに」

余りの多さに私は怯む。

影族達は待つてはくれない。

彼は無言で刀を構える。

それに呼応したように影族達が暗闇から一斉に襲いかかった。邪気にも似たあの叫び声をあげながら……

同時刻、

封鎖された商業地区……

その一角を疾走する三つの人影があった。

人影の内、2人は学校の制服らしい、校章入りのブレザーを着用し、1人はスラックス、1人はスカート……まだ夜の街にいるには若すぎる少年と少女だった。

「優衣！！反応はこつちで間違いないんだな！」

走りながら少年が少女の怒鳴るように聞く。

「うん！まだ生き残っている……戦っている人がいます」

その少し後ろを追従する少女が答える。そしてまた何かを感じたのか少年に叫び返す。

「でも……影族の反応もどんどん増えてます！このまま突入するのは危険です」

それを聞くと、少年は少し速度を上げ、先頭を走るもう1人に声を掛ける。

「アルゼ、どうする？」

もう1人……銀色の髪を靡かせ白のYシャツ、黒のスラックスという少し大人びた格好に身を包み、先頭を走り続けていたアルゼと呼ばれた少女はそちらに視線だけを向ける紅い宝石のような目が少年をとらえる。

「ここで立ち止まればもう生存者を救うことはできなくなる。囲みを突破して合流する」

「敵が多すぎる、いくら俺達でも突破できるか……」

「これは私達にしかできないこと。そして」

弱気な発言に少女は相手の言葉を切り、

「突破できるか、じゃない。突破する、でしょう？」

少し微笑みながら答える少女に呆れながらも少年は思わず笑みを零す。

「アルゼの言うとおりだな。俺達には力があるんだからな」

その言葉に少女は深く頷き、再び視線を一点に向けようとした

その時である、

「……！、ま、待って！何、この反応は……？」

最後尾で今まで言葉を発していなかったもう1人の少女が突然声を上げ、足を止めてしまう。彼女も先ほどの会話を聞いていたはずなのに……と少し焦りを覚えながらやむを得ず2人も足を止める。

「どうした？優衣……」

突然声を上げた少女の方に少年は視線を向ける。

その視線の先には、

少女の真っ青な顔が見て取れた少し

「優衣！！どうしたんだ！」

慌てたように少年は少女に歩み寄り、両肩を掴み、自分に視線を会わせるようにする。

それに少し気を落ち着かせたのか少女はゆっくりと口を開く。

「……え、影族の囲みの中心……この先に強い、強すぎる反応があつて……そ、それが動くと同時に影族の反応が……次々と消えています」

その言葉に2人は驚いた。

囲みの中心……そこにいるのは救援要請をだした生き残りの兵員。そして偶然とバカな上司の誤解によってこの地獄に連れてこられた運の悪いとしか言いようのない民間人の2人だけ。

「……通信してきた護衛兵は通常弾しか持っていない」

「だが！、アレを持っていたとしても一体を食い止めるので精一杯のはずだろ」

反論する少年の言っていることは正しい。アレを使えば奴ら……通常兵器では傷一つつけられない影族にダメージを与えることができる。

……しかし、そのダメージでは影族を倒すことはできない。

少年の言うとおり足止めが関の山というものだ。

「ではどういうことだ！」

「お、俺にわかるはずないだろう！」

そんな言い争いをしている2人それを見ていただけだった少女がまた何かを感じたように震え出す。

「……こっちに、……くる！」

「……！」

それを聞いた瞬間、2人は言い争いをやめる。それを見計らったようなタイミング。

影族達の雄叫びと悲鳴がビルの合間から響き渡る。

それに呼応したように言い争いをしていた少女と少年がポケットからカードを取り出し、いつ襲われてもいいように身構える



もう1人の少女も同様に2人より後方に下がり、胸の上に祈るようにカードを構える。

その一拍後、

ビルの合間から3体の犬型の影族が飛びだしてくる。

……いや、飛ばされてきたという方が正しいだろう。

3体は彼女らの右前方にあったビルの壁にぶつかっていく。

2体は生き絶えたようでもう消滅していく。

しかし、残りの1体は半身を失いながらも、生きていた。

合間にいる何かに怯えているようにそちらに悲鳴を上げて何とか逃れようとする。

アスファルトを歩く乾いた靴音が周囲に響き渡る。

合間から何かがこちらに向かってくる。

彼女らの緊張が一層高くなる。

現れたのは少年だった。

構えている2人と同じ制服に身を包んだ少年。

しかし、彼も格好には似合わない日本刀を右手に携えている。

しかし、彼の持っていた刀は普通のものではない。

刀身が黒く染まっていた。

その姿を見た瞬間、

少年は彼に対する警戒を強める

後方の少女は彼の顔を見た瞬間何故なのか、とても驚いた表情を見せていた。

そして、最後の1人

銀髪の少女も同様に驚いていた

先日、影族に襲われていた少年それが今、ここにいる。  
彼らに対抗できる唯一の力を持って……

「き、君は……」

思わず、少女は声を出してしまう。

その声に反応して、少年はそちらにゆっくりと顔を向ける。

そして銀髪の少女の姿を確認すると……

「やっと、あなたに会えた」

会えたことが本当に嬉しいように優しく微笑んでいた。

平凡だった少年と銀髪の少女は化け物の蔓延る戦場にて再び出会ってしまった。

#### 第4話・出会いの夢と記憶の中で（前書き）

何かめっちゃくちゃになってきたように感じます。よければみてください  
ださい

#### 第4話：出会いの夢と記憶の中で

僕は白い霧の中を歩いていた。

周りの景色は全く見えない。

それなのに僕は不安なくある一方向にだけ真っ直ぐ進んでいく。

しばらくして、ようやく見えてきた初めての景色は夕焼けに染められたどこにでもあるような公園。

ただ、人が誰もいないことを除いてだが。

子供たちの為の遊び場

ジャングルジムにシーソー。

その無人の公園で僕は見つけた

1人ブランコに乗り、佇む少女

僕は少女に近づく。

同じ年くらいだろうか。

俯いていて顔は見えないが、白金の長い髪に透き通るような白い肌が覗かせている。

少女の前に立つと、ようやく顔を上げてくれた。

少し幼さの残るあどけない表情少女の髪と同じ白金の  
大きなくりくりとした目

その目が僕を見ていた。

そして、少女は僕に笑いかけてくる。ふにゃっという表現で正しい

だろうか。

すごく柔らかい、見ているだけで安心できる笑顔を僕に向けていた。

「君は……一体？」

しかし、少女は僕の質問には答えず、おもむろに立ち上がるとそれがさも自然のように僕の右手を指を絡めてくる。

意表を突かれて動けずにいる僕に構わず、少女はギュッと僕の手を握ってくる。

少し頬を赤らめ、照れたように笑う少女。

「……あなたと」

初めて少女は言葉を発する。

「あなたと会って、あなたに触れてみたい……それが私の唯一の夢でした」

本当に幸せそうに笑う少女に僕は不覚にも可愛いと思ってしまった。

「君は……」

誰、と聞こうとした瞬間、

周りの霧が急激に濃くなっていく。

「……もう時間。でもまたすぐ会えるから」

本当に残念そうな少女の顔も霧によってかき消されていく中、右手から少女の感触も消えていく。

「じゃあ……待ってるからね」その一言を最後に僕の視界はテレビの電源が切れたように真っ黒になっていった。

僕が目を開けて初めて見たのは白い天井だった。

まだ意識がはつきりしていない為か僕はぼんやりと天井を見上げる。

「……………夢？」

先ほどの出来事が夢？

夢にしては何故か鮮明に記憶に残ってる。

……………あの柔らかな手の触感も。

「夢、だったのか？」

ぼんやりと1人呟く僕。

「全て、夢じゃない」

透き通るような声が返事を返してきた。

えっ、と思わず声を出し、ベットの横に顔を向ける。

そこにいたのは…………

「おはよう」

あの初めて影族に襲われた夜に見せてくれた優しさ微笑みを浮かべた銀髪の少女がいた。

「……………おはよう」

反射的に返事を返してしまう僕それに彼女は静かに頷く。

「体は……大丈夫？」

「え……あ、はい。大丈夫だと思います」

「……よかった」

そう言うのと彼女は立ち上がり、ドアの横に設置されていたインターフォンを手に取る。

「ここは……病院？」

「いえ、支社の救護室」

相手が出たのだろうか、そう僕に返事を返すと彼女はインターフォンに小さく二言、三言話し受話器を返す。

そして改めて僕の横に座るやいなや、

「驚いた」

「……はい？」

まったく単語の意味がわからずに僕の頭に？マークが浮かんで飛んでいる。

「偶然巻き込まれた民間人があなた。いきなり発現して影族を倒しちゃうし、いきなり倒れちゃうし」

矢継ぎ早に何に驚いたのか説明され、ようやく僕の記憶が鮮明に甦ってきた。



「やっと、あなたに会えた」

その一言……

一瞬だけ対峙した両者の間に静寂が流れる。それを破ったのは4人の内の誰でもなかった。

「ま……待ってくれ……」

自分の後方に息を切らせながら新たな人影が現れる。

右手を庇い、左腕に白いコートを携えた若い戦闘服を着た青年

警戒態勢をとっている3人の内2人の少女はその姿を確認すると少し安堵したようにカードを下ろす。

「谷桐一等衛士……」

銀髪の少女が名前を呼ぶと、

谷桐は心底疲れたような顔を上げるが息が荒く、まだ言葉がでない為なのか左手を軽く上げて応じる。

谷桐の右手の状態を見た少女は慌てて近づき、手当てだろうか、何か言葉を呟きながら右手を両手で包んでいる。

「……じゃあ、こいつが偶然乗り込んだ民間人なのか？」

僕は治療の様子を見ていたが、

いまだ1人警戒を解かない少年の言葉に眉をしかめる。  
それに構わず少年は続ける。

「本当は僧法善委員会のスパイじゃないのか？」

「に、兄様。いくらなんでも、それは考えが行き過ぎです」  
治療を行っていた少女がおろおろとしながらも、反論する。

「それに、あの人達が発現者を使うこと自体考えられないことです」  
その一言に、少年はバツが悪そうに呻くとおずおずと警戒を解いていく。

緊張していた空気が少し和らぐそれに満足したのか少女は僕に顔を向け、ジッと見てきた。  
意図のわからないそれに僕は頭の上に疑問符を浮かべ顔を軽く傾ける。

「……えと、八神陽一……先輩ですよね？」

「……？はい、そうだけど」

唐突に名前を呼ばれて返事をしてしまうが、ここである疑問が生まれる。

「名前……教えましたっけ？」

今の今まで教えた記憶はないはずだが、と思っていると、

「あ、私と兄様……すす珠洲高の一年です」  
珠洲高校……

その名前を聞いて、僕は納得した。

「なるほど、同じ高校の……後輩だったんだ」  
今まで気づいていなかったが彼女ら2人は自分と同じ制服を着用している。

因みに八神は二年。

「ん？……でも、悪いけど僕の方は君達と話しはおろか会った覚えもないんだが」

自分は……自分で言うのは悲しいが、特筆した特技を持たない平凡な高校生である。

周囲に目立つようなことには縁のない人間だ。

それを聞いた少女は何故か複雑な表情を見せていた。  
どことなく寂しいような、残念そうな……そんな表情。

「えっと……面識があるのは私だけなんです。半年前です、高校に向かう途中、交通事故に巻き込まれそうになったんです」

思い出を語るように言葉を紡ぐ少女。

半年前……交通事故、確かそんなことあったような、無いような、記憶がはつきりしない。

「その時、自分の身を省みず、助けてくれたのが先輩でした。……多分、助けてもらってなかったら私は死んでいました。

先輩は命の恩人なんです」

嘘を言っているとは思えない。なら何故記憶がはつきりしないんだろっ。

思いだそうと唸っていると、

唐突に空気が変わった。

今までの影族とは全く桁の違う殺意と敵意。

異種の驚異が近付いてくるのを発現者ではない谷桐でさえその強大さを感じていた。

「……話はまた後だ」

少年が少女と谷桐の前に立ち、カードを取り出す。

「迂闊だった……まだ敵を全て倒した訳でもないのに」  
銀髪の少女もそれに倣う様に横に並び、カードを抜く。

「優衣……2人を連れてここから離脱して」

「え……？」

その一言を一瞬理解できずに、少女は彼女を見る。

「私達で敵を食い止めるから、その隙に待機中のへりに乗り込んで」

「で、でも……」

「急いで！」

有無を言わせない強い口調に少女はビクツと肩を震わせる。

しかし、彼女が動く前に、1人が動いた。

「……！？、君、何してる！？」

銀髪の少女が見た先には、

2人の横に並び、黒い刀身に敵意を乗せ、気配の先に構える八神の姿だった。

「僕も戦いますよ」

端的で真っ直ぐな言葉と視線を向けながら、彼は並び立っている2人にそう告げる。

「……素人は下がってやがれ」

それに最初に反応したのは少年の方だった。低くドスの利いた少年らしくない声を放ち、八神に睨みつける

しかし、それに八神は怯まず、それどころか、少年の睨みを全面に受けながら、表情を崩さないでいた。

「それは無理だ」

「下がれ……邪魔なんだよ」

「引けない理由があるから……戦うんだよ」  
その一言に少年を含めた3人は静かになる。

彼が引けない理由……

それは何なのだ？

「理由……って何？」

その疑問を皆を代表して答えたのかわからない。しかし、とっさに銀髪の少女は問う。

それに八神は目を瞑り、考えをまとめたのか、口を開く。

「今まで、あの化け物の類を見ることがするのは自分1人だけだ  
とおもっていた」

そう、自分に見えて、友人の誰1人として見えない存在。

それは恐怖だった。

「誰にも相談できず、相談できたとしても、理解されないだろうと  
思った。諦めていた」

誰一人として自分の恐怖を理解されず、理解されることを自分自身  
で諦めていた。

それは疎外感……孤独だった。

「でも……そんな時に、僕は出会ってしまった。……僕の見えるも  
のが見える……あなたに」

疎外されていたように見えたあの夜の月が暗雲から抜け出し、銀髪  
のあなたを見せてくれた光

それは、僕の求めた光。

孤独を消し去る小さな希望

「だから、あなたと共に行きたい。あの化け物……影族というもの  
がどういふ存在なのか知りたい」

人が光を求めるのは、当たり前のこと。希望を持つことは普通なの  
かもしれない。

それは勘違いかもしれない。

でもそれは僕の求める本当の答えかもしれない。

僕は徐に、谷桐さんから白いコートを腕から抜き出す。そして彼女の目の前に立ち、

「僕は……あなたを護りたい。あなたが……僕を護ってくれたように」

そう自分の想いを伝えながら彼女が掛けてくれたあの時のコートを彼女に差し出した。

一瞬の沈黙。

しかし、すぐに沈黙は破られる

「……後戻り、できないよ？」

頭に響いた声と同じ問いを彼女はしてきた。赤い宝石のような目を僕に向けながら、

だから、僕は答えた。

「もう、…後戻りできないよ」

自分で決めたことだから……

それに嘘はつけないから……

だから、僕は答えた。

「……わかった」

声を発したのは彼女だった。

「あなたの知りたい真実を見せるため…一緒に行きましょう」

彼女はコートを受け取り、  
その純白に再び身を包む。

その姿はどことなく嬉しそうだった。

「……………」

毒気抜かれたのか少年は黙って構えを直す。

後方の2人も意を決したのか、カードを、拳銃を構える。

それを見て、僕も構え直す。

「……………アルゼ」

隣の彼女がふと呟く。

「ん？」

彼女に視線向ける。

「……………名前……………あと……………」

彼女……………アルゼは僕を見る。

「コート……………ありがとう」

あの時……………助けてくれた時に見せてくれた微笑みをアルゼは浮かべていた。

「……………どういたしまして」

僕も微笑みを返して、前を見据える。



敵の気配は目の前にある。

大きな影が闇から這いだしてきていた。

「じゃあ……護るために……」

全員がそれに合わせて戦闘態勢をとる。

「戦いを始めよう」

## 第5話：異質との戦い 前編

日中なら、サラリーマンなどが行き交い、日々自分の為、知らず社会の歯車を動かす為の空間

平穏なるその空間は今、

命を掛け合う戦場と化していた

襲撃は唐突だった。

闇に蠢く影……それが今までの緩慢な動きを破り、対峙する彼らに襲いかかった。

振り下ろされる影の一部。

車にも匹敵する大きさのそれに当たれば人間など瞬時に肉塊となつてしまっだろう。

しかし正面から対峙し、臨戦態勢を整えていた為、横に飛ぶことで難なくかわす。

「く……久し振りに大物が来やがった！」

少年の言葉を聞きながら、八神は影の全容を初めて確認した。醜悪な表情の読み取れない頭部異様なほどに太い前足。

黒いその体から波立つ荒々しいもの感じる毛並み  
それが野太い唸り声を上げてこちらを睨みつけている。

「お……狼!？」

思わず八神が呟いた言葉がその化け物には一番妥当な表現だろう。

しかし、その表現でさえ化け物の存在を表すには不十分に思えるほどそれは大きい。

普通車両を優に超え、大型トラックにも匹敵するのではないかと思えるほどの巨体がそこにはあった。

「こいつは……予想外だな」

横に並ぶ少年が化け物への警戒を解かずに呟く。

しかし、今まで対峙した奴らを遥かに超える巨体に少年は興奮を隠せないように見えた。

予想外の敵にも恐れない。少年の余裕が見て取れた。

「……だが、やるしかない」

決意と共に少年の周りにあの夜と同じく、風が吹き出していく。

「我、汝の力を欲する。

敵を討ち貫く為、友を護る為、弱きを護る為。無影、形の違う我が

僕よ。今、力を表せ！」

その言葉に反応したのか、少年の持つカードが消え、周りの風を更に強くする。

風が消えた時、手にカードはなく、代わりに黒い何かを彼は携えていた。

長く、一切の淀みのない黒き柄  
その先に同じく黒光りする十字に流れる刃。

色さえ気にしなければ素人さえ美しいと思えるほど十文字槍が彼の  
手元にあった。

「震槍……黒土無双」

長い言葉の後、彼は親しみを込めたように槍の名前を呟く。

「それが……君の武器か」

思わず口ずさむ僕に少年は目もくれず、瞬時に動き出す。

その動きに反応の遅れた敵は、慌てて、前足を引き上げ横に薙いで  
いく。

「動きが鈍重過ぎる！」

慌てることなく少年が夜空高く跳びたつ。

その高さは化け物を超える。

決して人間のできる限界を超越していた。

「おおおおお！！」

そう叫びながら少年は重力によって加速する槍の一撃を化け物に突き立てる。

初めて聞く肉に突き刺さるという効果音。

それに合わせるように化け物が大きく呻く。

少年はそれに安堵することなく直ぐに穂先を抜き去り、地上に降り立つ。

「……こんなじゃ、死ねないか？」

そう先ほどの眩き、先ほどの緊張が嘘のような妖しい笑みを浮かべ、少年は駆ける。

いきなりの味方の先制攻撃に僕は呆気をとられ、追撃すべき瞬間なのに動けずにいた。

「こら、見てないで、行く！」

そんな僕の頭をはたいてアルゼも化け物に走り出す。

「……わかりました！」

それに続いて僕も駆ける。

彼女も走りながら、手に持つカードを振りかざす。

「……あの化け物には私の直刀じゃ不利、なら！」  
走りながらも感じる再度吹き荒れる風。

「汝、無影。我との契約に従い無から剣、剣より形を変え、さらなる力を与えよ」

少年と同じくカードが反応する

青白い光を放ちながら形を瞬時に形を変えていく。

現るは刀ではなかった。

彼女の上半身を優に超え、常人では持ち上げることさえ不可能と思えるほどの大剣。

全てを薙ぎ倒す威風を備えた黒いそれを軽々と持ち、

彼女は疾走する。

「あなたは右足、私は左を」

追従する僕にそう伝えて、左に進路を取る。

「わかった！」

聞こえたかはわからないが僕はそう答えて、右に進路を取る。

幸い、化け物は後ろに立つ少年に気を取られ、こちらに気づいていない。

瞬時、僕と彼女は巨大な足を捉える。

「今!!」

彼女の叫びに応え、僕は持てる力を込めて、刀を振り出す。

ほぼ同時と言ってもいいだろう斬撃音が重なって聞こえた。

斬撃音と共に化け物は体制を崩し、前のめりに倒れ出す。

それに潰されなかったのは、

今、自分の中にある力のおかげだろう。

斬撃と共に少年のいる後方にその勢いのまま、走り抜けた。

「……素人のくせになかなかやってくれるな」

僕を迎えてくれた少年の棘のある言葉を無視しながら、僕は構えを直す。

横を向くと、アルゼもまた無事なようで、大剣を構えていた。

「……正直、ビックリ」

先ほどの少年の言葉に答えたのかアルゼも視線だけを向けて、言葉を紡ぐ。

「……なら、そんなことやらせないでよ」

僕もそれに合わせて軽口を言う

「……ふん！」

少年はまだ僕のこと気が入らないのか、顔を横に向く。  
アルゼはというと僕の軽口に微笑みを浮かべていた。

ため息をつきながら、化け物を見る。

今の攻撃をもっともせずこちらを睨みつけながら、立ち上がりこち

らに向き直る。

「やれやれ、耐久力だけは雑魚以上か……な……!？」  
少年の言葉が途切れる。

僕も驚きを隠せない。

視線の先、化け物の体から次々と黒いモノが点々と流れ出していく。

それがアスファルトに点いた瞬間、それは次々と形を変えていく。

……黒い犬へと。

「……ははっ、巨体は伊達じゃないってことか」  
呆れたよう呟く少年。

しかし、先ほどまでの余裕はどこにいったのか、焦りを感じているように聞こえた。

それもそうだろう。

増殖を続けていた黒犬は今や数を揃え、30以上の大軍になっていた。

それらが重なるように唸りながら、親の命令を待っている。

あの黒犬のみなら楽勝に勝てる

でも今は状況が違う。

あの化け物の動きにも注意しなければならない。

「……くる！」

アルゼの一言に僕も刀を握る力を強くなる。



「ウオオオオン!!」

化け物の叫びに黒犬が四方八方に走り出す。

突っ込んできた一匹を難なく仕留めながら、僕は周りを確認する。二人も化け物の攻撃を警戒しながら難なく、黒犬を仕留めている。

化け物も今は様子見なのか攻撃を仕掛けてこない。

ふと足元を見ると僕らを囲んでいる黒犬とはべつに十数匹が反対側へと失踪していく。

「……マズい!!」

僕はあることに気づく。今、僕を含め、先制攻撃を仕掛けた三人は化け物と対峙している。

その反対側には、二人残っている。少年に優衣と呼ばれた少女と谷桐さん。

少女が僕と同じ力を持っているとしても、1人で……しかも谷桐さんを庇って戦うとしたらむりがある。

囲みを突破して何とか、そちらに向かおうとする。

「……っ!!」

向かおうとした瞬間に、巨体から繰り出される一撃。

後方に飛んでかわす。

しかし、化け物は追撃にでることなく、近づいてきた時のみ攻撃を仕掛けてくる。

「くっ!これでは近づけない」焦りだけが募る。その中でも次々と

襲いかかってくる黒犬を捌き、何とか助けにいけないか思案を重ねる。

「大丈夫です」

いきなりの声に驚き、振り向くと背を預けるようにアルゼが反対に大剣を構えていた。

「優衣と谷桐は大丈夫」

「で、でも谷桐さんは……」

「信じて……」

視線だけを僕に向ける彼女。

その二人を信じる真っ直ぐな目

……その目に僕は……

「……わかった。信じるよ」

その一言を聞くと彼女は再び黒犬の群れに向き直る。

「……ありがとう」

小さい呟きだったが、よく聞こえた。

僕は、刀を構え直す。

「まずは、こいつらを倒す」

「そう、……それから」

背後にお互いを感じながらそう呟くと、勢いよく二人は包囲する黒犬に向かっていく。

向かってくる十数匹の影族に狼狽しながらも照準を合わせる。

「くっ！どうする優衣君！！」

拳銃を構えながら、慌てたように谷桐は横で未だカードを構える少女に叫ぶ。

「慌てないください。……谷桐さんはこれを」  
そう言くと少女は腰に付けていたポーチを渡す。

それを疑問に思いながら開けるとそこには拳銃用のカートリッジが入っていた。

「重かったんですからね」

その頬を膨らませて一言を言くと彼女は静かに言葉を紡ぎ始める。

「まさか……。こいつは」

そのカートリッジの弾の正体に気づいた谷桐は瞬時に取り替える。

そして、向かってくる黒犬の一匹に照準を合わせて、引き金を引く。

銃声が響き渡る。

それと同時に狙撃した一匹が進撃方向の銃撃の衝撃により逆へとはね飛ばされる。

「やはり、これは！」

「現在、通常兵器で唯一影族にダメージを与えることのできる対影族用弾丸。名前は……」

「チューニング・バレット」

呟くように少女の説明の後に続く谷桐。

「また試作段階で数の少ないモノを貰ってきたんです」

「これなら、奴らを倒せるんだな！」

「そんなにダメージは与えられません。だから……」

谷桐の横に少女は並ぶ。

その手に携えるは黒い和弓と矢

「谷桐さんは近づいてきた影族の迎撃と牽制を。私がトドメを刺します」

「わかった。まかせてくれ」

そう答えると谷桐は拳銃を構え直す。少女もまた弓を引き絞る

「では……日笠流門下生、生島優衣。正々堂々参ります！」

銃声と共に戦いは激しさを増していく。

## 第6話：異質との戦い 後編

いつの間にか濃くなっていた  
夜の闇。

それは、光の届かない街の外れを飲み込んでいる。

その中にうごめく黒い影。

人間や上位同種に「無影」と呼ばれるそれは意志や知能がないものとされている。

しかし、今ここに存在する無影たちはある方向に注目を集めている。

目のあるべき場所に目はなく。見えるはず無く。

耳のあるべき場所に耳はなく。聞こえていないはず。

なのだが、彼らは確かに  
見て、聞いて、感じている。

彼らの先に見える人間と同種たちによる生存権を賭けた熾烈な殺し  
合いを……

奇声を上げながら優衣たちに襲いかかる黒犬の集団。

常人なら恐怖で足がすくみそうな状況にありながら、

優衣は臆することなくその中の一匹に狙いをつける。

ただ冷静に、

淀みない水の流れを心に浮かべ

引き絞った弓を放つ。

弓独特の風を切る音と共に放たれた矢が黒犬に迫る。

かわすことも出来ず、

矢は黒犬の胴体に軽々と風穴を開ける。

悲鳴を上げる暇もなく消えていく黒犬。

しかし、仲間の死にも構わず集団はただ従順に命令に従い敵に向か  
つていく。

優衣は動揺することなく。

素早く左手に矢を精製し、放つ

一つ。

二つと集団は数を減らす。

しかし、数の上で優勢な黒犬を下すにはまだ足りない。

矢の犠牲にならなかった先頭の二匹がようやく優衣を射程圏に捉え  
る。

知能があるのか本能的なものか二匹が左右に分かれ、弓の側面から攻撃を仕掛ける。

優衣は一方に狙いをつける。

黒犬は正面から、背後から同時に襲いかかる。

その瞬間を狙い正面の黒犬に弓を放つ。

「ギイイイ!!」

見事に頭部に命中し、溶け出していく黒犬。

すぐさま精製に移る優衣のその隙について、背後に迫る黒犬が牙を剥き出し、食らいつこうと飛び上がる。

完璧なタイミングの攻撃。

しかし、優衣は動じない。

後少しでその決着がつく。

その決着は先延ばしにされる。

一発の銃声が街に響き渡る。

それと同時に黒犬が横に弾き飛ばされた。

「……悪いが、指一本触れさせはしない」

銃口から未だ煙を燻る拳銃、ごしに谷桐が呟く。

「しかし、優衣君……少し危なかったぞ」

周りに展開する黒犬に警戒しながら、背後に背を預ける谷桐は優衣に話しかける。

「谷桐さんを守りは任せましたから、だから私は攻撃に専念しているんですよ」

無茶苦茶とも言えるその言葉にやれやれ、といった感じでため息をつく。

「君もやはり、彼の妹というだな」

「ふふ……そうですね。無茶ばかりする兄様に似ている。私もそう思います」

隙をうかがっているのか、黒犬たちは周りを囲み退路を断っていく。

「では、後ろはお願いします」

「了解。任せました」

そうお互いに言い放つと優衣は谷桐を、谷桐は優衣を背後につけ、自分の得物を構え直す。

何匹切り捨てただろう。

数も覚えていないほど僕は突っ込んでくる黒犬を倒していた。

それでもまだ黒犬は数を減らさない。

襲いかかる黒犬を切り捨て様に化け物に視線を移す。



今はもう黒犬を産み出してはなくこちらの様子をつがっている。

どうやら今周りを囲む黒犬だけで打ち止めのようだ。

「無限に生み出すことはできないようだな」  
それにホッとしながら僕は二人に目を移す。

少年は囲まれないようにするためか常に動き回り、相手を翻弄している。

襲いかかる敵に対し、数匹相手でも簡単に黒土無双によって葬っていく。

彼の強さに頼もしささえ感じる

一方のアルゼは大剣のリーチを上手く利用し、周囲の敵を一気に薙ぎ倒していく。

軽々と持ち上げる大剣による一撃は見ている僕でもわかるほど強力な威力を持っている。

勝てる……

そう僕は確信していた。

その時だった。

僕の周りを囲んでいた黒犬たちが一斉に突っ込んでくる。

「そんなことしても無駄なんだよ！」

慌てることなく僕は、刀を振るい、黒犬を切り伏せていく。

それでも諦めず。絶えず、攻勢を緩めない黒犬たち。

それらを切り捨てるのに集中していたのがいけなかった。

「馬鹿やろう!!！」

少年の怒声が耳を打つ。

今まで沈黙を守っていた化け物が僕の集中の隙に巨体に似合わないスピードで走り出していた

気づいた時には、それは目の前にいた。

かわすことも出来ず、防御すらかなわない状況。

大型トラックに匹敵する巨体。

それが近づいてくる。

「っ!!！」

衝撃とそれ同時の浮遊感……

それも一瞬。

僕は背後にあったビルへと吹き飛ばされる。

鈍い音と共に背中に衝撃と痛みが走る。

「ぐう！！」

痛みに耐えながら僕は精神を必死につなぎ止める。  
視界がぼやける。

衝撃のおかげで頭が揺れる。

回復につれ、一つの疑問が生まれる。

あの巨体に体当たりされたのにも関わらず、意外にも衝撃が軽かったこと。

何故、と思う前に答えがわかった。

ぼやけていた視界が回復していくにつれ、目の前の景色に驚愕する。

ビルの壁に座り込む僕にもたれかかるようにうつむく銀髪の少女。

「ア、アルゼ！！」

慌てて僕は声をかける。

わかっていた。

化け物が体当たりする瞬間、  
何かが間に割り込んできた。

それは、アルゼだった。

彼女は大剣の腹を相手に向けて防いだ。

しかし真っ向から体当たりを受けて無事なわけではない。

結果、衝撃を殺しきれず、僕にぶつかりながら弾き飛ばされたのだ。

「大…丈夫」

かすれたように返事をする彼女は弱々しい。ふらふらと大剣を地面に突き立て立とうとするがダメージが大きいのか、足元は覚束ない。

「怪我は！怪我はない！」

僕も立ち上がり、怪我はないか彼女を見る。

見た目はたいした怪我は見えない。しかし、唯一彼女の口元から一筋の血が流れている。

「内臓……、ちょっとやられちゃったみたい」

そう言うやいなや、彼女の膝は崩れ倒れそうになる。

それを僕は慌てて抱き止める。

「ごめん！僕の……僕のせいで……こんな」

「君……は」

謝る僕に彼女は声をかける。

「え？」

「君は……大丈夫？」

「僕は大丈夫！それより君が！」

「……よかった」

困惑する僕に対し、アルゼが見せたのは安心したような微笑だった。

「よかった……。君が……。死ななくて」

「アルゼ……さん」

そんな彼女を見て、僕は……

不甲斐ない。

彼女を守りたいと言ったではないか!!

だから今、

ここにいるんじゃないか!

それなのに……

現実はどうだ……

力があることで過信し、

挙げ句、致命傷を負いそうになりながらまた、彼女に守られた

僕の代わりに怪我まで負わせて

ちくしょう……

力……力が欲しい。

足りない、まだ足りないんだ。

もっと……力を!!

そんな僕たちを黒犬たちが囲んでいく。

少年が必死に僕たちを助けようとしているようだが、妨害されて近づけない。

「……いるんだろ」

彼女を抱き止めながら、  
僕は呟く。

彼女は何事なのかわからず僕を見ている。

「……いるんだろ」

僕は同じ言葉を紡ぐ。

『……はい』

頭に直接響く声。それを僕ははっきり聞き取った。

僕に力を与えてくれた声。

それが今、しっかり返事をしてくれた。

「頼む……」

僕の考えていたことはわかっているはず、  
あえてそれだけ告げる。

『……いいの?』

「後戻り…できないんだろ?」

『本当に……人じゃ無くなるかもしれないんだよ?』

「……いい。彼女を……助けたいんだ。どんな代償だって払ってやる」

彼女の為なら……

どうしてそんなこと言えるんだろう？

僕はそんなに惚れっぽい人間だったのかな？

……でも

「彼女を……助けたい」

それだけは誰にも否定できない僕の真っ直ぐな思いだった。

『……わかりました』

何故なのか悲しそうに呟く声。

その言葉を聞いた瞬間……

力を与えてくれたとわかる熱い鼓動が胸を中心に体に伝わっていく。

『手を……前にかざして』

声に従い、開いていた左手を黒犬たちにかざす。

気配が変わったのがわかったんだろう。黒犬たちは急に怯え出す。

左手をかざした瞬間、僕の口が勝手に何かを口ずさんでいく。

（……！？……口が……勝手に！？）

そう思っていたやいなや、口は止まる。

『第一式……紫炎陣』

頭に響き渡る声を聞いた瞬間、

周りの景色は一変した。

黒犬たちが……燃えている。

青白い炎に包まれ、もがき苦しんでいる。

地獄絵図にも見えるその光景に僕は驚きを隠せない。

（こ、これを……僕が？）

この場所にいる黒犬、そしてあの化け物さえ炎に包まれている一つ、また一つと倒れ伏していく。

数瞬後には、化け物一匹のみしか生き残ってはいない。

炎に焦がされ、苦しむ化け物。

そして、最後の力を振り絞り

月に向かって遠吠えを震わした

辺りは静けさを取り戻した。

破壊された道路や車。

そののみが残され、原因となったものの全ては消えた。



「……全部、倒しちゃった」  
アルゼの声が聞こえる。

でも……何だかとても疲れている。眠い。

「君が……」

やったのか、と言われたように聞こえた。

でも、それを答える前に僕は、彼女を離すと同時に地面にと倒れ伏す。

慌てたように、僕に声をかけるアルゼ。

でも、ごめん。

とても、眠いんだ。

意識が遠くなっていく。

そこでふとあることを思い出し頭の中で言葉を紡ぐ。

（ありがとう……）

それだけを言いたかった。

『……はい。どういたしまして』

その返事を聞いて安心したのか

僕は意識を完全な手放した。

## 第6話：異質との戦い 後編（後書き）

一応、異質との戦い。これで終わりです。戦いを描くのはとても難しいです。下手ですみません。仕事しながらですが早く更新できるように頑張りますので、読んで頂いた方々これからもよろしく願います。

## 第7話・彼女らの素性と勧誘

そして僕は今の今まで気を失っていたらしい。

アルゼの話だと影族を倒したその後救援隊が駆けつけ、急いで僕をヘリに乗せ、今に至るらしい。

「そうだ！！アルゼさん、怪我は大丈夫なの！」

昨日のことを思い出す内に彼女が僕を庇って怪我をしていたことを思い出した。

「大丈夫。もう何ともない」

そんな僕に彼女は思い出したように応える。

「でも、内臓の怪我って」

「大したことない。調べたらそんなに傷、ついてなかったらしいから」

微笑みながら応える彼女に少し安心する。

「よかった……。あの、その、本当にごめん」

昨日のことを思い出し、急に罪悪感が生まれてきて、僕は謝った。

「……もう良いの。お互い生きている。だから良いの」

「でも……！」

「あなたは、影族を倒してくれたでしょう？」

「え？あ、あれはたまたま」

上手くいっただけと答えようとしたが、彼女に止められる。

「偶然でもあなたは逃げずに私を助けてくれた。だから……  
これでおあいこ」

そう彼女は言ってくれた。その言葉に僕の罪悪感は消えていく  
「アルゼ……さん」

「……アルゼ」

「え？」

「さんはいらない。アルゼでいいよ。今日から君も仲間、友達だから」

そう言つて優しい微笑みを浮かべてくれる彼女を見ることができず、  
僕は顔を真っ赤にしてうつむく。

「……アルゼ」

言葉を噛み締めるように僕は彼女の名を口にする。

「……はいはい、もうそのへんでいいか？先・輩」

突然ドアの方向から声が聞こえ慌ててそちらを見ると槍使いの少年  
がやれやれといった感じでこちらを見ていた。

「君は……昨日の」

「名前は谷津秋、または生島秋どちらでも好きな方で呼べ」  
そうぶつきらぼくに言つと少年……秋はアルゼを見る。

「こいつに影族のこと説明するから作戦会議室に連れてこいとさ。  
バカ指令が」

「わかった。……えつと」  
不意にこちらを見る彼女。僕は少しドキツとしながらどうしたのか  
疑問に思う。

「名前、教えて欲しい」  
それだけでなく気づく。

彼女の名前は教えてもらったがこちらは名乗っていなかったことを。

「八神……八神陽一です」

「……陽一でいい？」

「えー？……あ、は、はい」  
いきなり名前で呼ばれ、ちよつと照れてしまう。それでいて何故か  
ちよつと嬉しい。

「あゝはいはい。さつさと行きましょう？八神先・輩」  
もう良いだろ、とといった感じで秋は部屋を出る。

僕らもそれに続いた。

作戦会議室と呼ばれる少し他の部屋より広いそこに入るとそこには見知った人物がいた。

こちらに気づいて嬉しそうに手を振る少女…優衣

そして今は普通のサラリーマン風の格好をした何故なのか不機嫌な表情をした青年…谷桐さん

そしてその部屋の中央の席に座るあの茶髪の……頬に湿布を貼った人がいた。

「バカ指令。先輩、呼んできましたよ」

秋がそう言つと顔をこちらに向け、笑顔でこちらを迎える。

「ああ、ありがとうございます……あとバカは余計です」

「……あゝ気をつけます。バカ指令」

まったく気をつけるつもりなしの秋にため息をつきながら僕たちに座るよう促す。

僕たちが座ると彼が話し始める

「はじめまして……というわけではないですが。まずは、昨日のことについて改めて謝罪します。……申し訳ありませんでした」

そう言いながら彼は年下である僕に対して深く頭を下げる。

「い、いえ！過ぎたことですから。頭をあげてください」

ありがとうございます、と安心したように顔をあげ、彼は話を続ける。

「では最初に自己紹介します。私は防衛省影族対策室、東日本担当指令、那賀須文博といいます」

「ぼ、防衛省!？」

まさか国家機関の人とは知らず僕は驚く。

「肩書きだけです」

「本っ当に肩書きだけだよな」

秋の一言に凹み気味になる那賀須さん。

「……えっと。彼が谷津秋君、君と同じ発現者です」

それでも挫けず那賀須さんは紹介を続ける。……なんか色々、苦勞しているようですね。

「そして彼女が谷津優衣君。彼女も発現者で秋君の妹です」

「谷津優衣です。あ、学校では名字、生島で通っています。これからよろしく願います。八神先輩」

ぴよこんと礼をする優衣につられてこちらも礼してしまう。

「あれ? 何で名字が2つ？」

「色々あったんだよ。気にしないでくれ」

秋の不機嫌な声に、聞かれたくないということを言外に感じ、聞かないことにした。

「そして君の隣にいるのがアルゼリア・ユート・クラストフ君。名前の通り彼女は外国人、フランスの生まれだね。皆は愛称でアルゼと呼んでいる彼女もまた発現者の一人」

「よろしく」

微笑みと共に投げかけられる声に思わず顔を赤らめてしまう。

そんな僕を不思議そうに見る彼女。そして何故か不満そうにこちらを見ている優衣。

「そして最後に対影族部隊所属の谷桐良司一等衛士です」  
まだ不機嫌そうな表情をしているが、こちらに手を上げて挨拶してくれた。

「えっと、今ここにいないけどもう1人日井鷲要君という人がいます」

……ああ、僕が勘違いされた原因の人が。

「そいつは今何してるんだ？」

「それがまだ、こちらについていないんです」

「はあ!？」

秋は信じられないといった感じで理由を聞く。

「彼からの連絡だと、野暮用ができたから数日遅れると先ほど連絡がありました……」

「ふざけるな!!」

いきなり谷桐さんがテーブルに右手を叩きつけ、立ち上がる。

「そいつのせいでこっちには犠牲者……死人がでてるんだぞ!!隊長を含め隊員17名だ!その責任をどう取るつもりだ!」

不機嫌だった理由がわかった。そうだ。僕は目にしたではないか。



隊長が死ぬ瞬間を……

他の隊員たちも助からなかったのか。

「……責任は全て私にあります彼を日井鷲君と勘違いして出撃させたのは私ですから」

今までの優しい表情が消え、指令としての……厳格な態度を持つ那賀須さんがそこにいた。

思わず彼の変貌ぶりに僕は気圧されてしまう。

「しかし、今はその時ではない全てが終わった後、私は全ての罪を償うつもりです」

その言葉に納得いかない表情をしているが、黙って席につく谷桐さん。

「……では、本題に入りましょう。影族についてです」  
僕に緊張が走る。

ようやくあの化け物に知ることができる。

「あの影族という存在については、長きに渡って議論がかわされています。異星人とか太古の昔から存在する古代種という意見がありますが、その正体についてはまったくの不明です」

「わからないんですか？」

「はい、そして彼らと私たち人類との関係はとても長い歴史にあります。……面白い話をしましょうか」

「？」

「あなたは影武者という言葉を知っていますか？」

「影武者、ですか？」

何故そんな話をするのか？

「ええ、戦国時代などで大将を守るために体格などの似た人間に大将と同じ身なりをさせて囷になるものというものです」

「でも、何故影族の話でそれが関係するんですか？」

「……影武者という言葉はね、表面上は先ほどの説明で良いんだけど。その言葉の本当の意味は別にあるんだ」

そこで那賀須さんは、一旦区切り、真剣な表情で話し始める。

「初めて影武者となった者の正体。……それが実は影族だったんだよ」

その一言に僕は驚きを隠せない

「影族というモノは色々な種類に分かれている。形を為さない姿無き影族の無影。生き物ではない個体に変化した個影、アルゼや谷津兄妹の使うあの刀や槍がそれに当たるんだ」

「ええええ！！あれは影族なんですか！？」

「そうです。個影という種類を使役し、影族と戦える武器と変化したモノ。黒装機と私たちは呼んでいます」

「黒装機を扱える唯一の人間。それが私たち、発現者と呼ばれる能力者たち」

那賀須さんの言葉を繋げるようにアルゼが呟く。

「黒装機に関しては後日。話を戻しましょう。次に無影が知能をつけ、動物型に進化したモノ私たちが敵として認識している獣影と呼ばれる種類です。先日現れた犬型の影族がこれに当たります」

そう語りながら、那賀須さんは僕に一枚の写真を渡してよこす一見普通の……一人のスーツ姿の男性が犬に何かを与えている写真。

「これは？」

「獣影との戦闘になる数時間前に私たちの配備していた監視カメラに移っていたものです。よくみていただければお分かりになると思います」

そう言われて、僕はじつとよくその写真を見てみた。

「……あれ？この犬！まさか」間違いはない。こいつは……昨日の夜に僕たちに襲いかかってきた黒犬だった。

「お気づきになりましたね。その犬は君らが撃退した影族の長に鳴る前のものです」

「長……って、まさか！あのでかい奴のことですか！！」

「……ええ。我々が発見したときはそのサイズの一匹しか確認されていませんでした。」

しかし数時間後にはそれが巨大化し、多くの影族を生み出してしまい今回の商業区襲撃に至ってしまいました」

那賀須さんは言葉を切り、写真の中の男性を指し示す。

「その原因を作ったモノ。そしてこれが、私がはじめに話した影武者というモノの正体ですよ」

「え……この人が？」

那賀須さんの指し示す男性をよく見てみるが、僕にはただのサラリーマンにしか見えず、首を傾げる。

「一番はつきりとわかるには彼の影のある部分を見てみればわかります」

そう言われて僕はその写真を改めてまじまじ見ると彼の指摘された部分にある違和感をはつきりと認識した。

「影が……ない？」

本来ならあるはずの太陽によって現れるサラリーマンの影が写真にはまったく無かった。

「それが、彼が人外である証拠です。影族の中で最上位に位置する部類。私たちは彼らを人影と呼んでいます」

「人影……人型の、影族」

「彼らは獣影という存在からさらに進化した種族です」

「獣影から？でも、どうやってですか？」

「……人を喰らう ことです」

「……」

「人影は人を喰らうことによつてその人間が持っていた知識や記憶を取り込むことで人型に成ったモノです」

「本来、人間の精神のみを糧にしている獣影が人間自体を喰らうモノは本当に稀にしかいません」

那賀須さんの言葉を補足するように優衣が真剣な表情で続ける

「しかし、その稀こそ。写真に写る彼こそ私たち人にとって大きな脅威になっている存在なんです。そしてその脅威から人を護る為に私たちはここにいます」

「そう。その為に私たちは影族に対抗できる戦力を集めています。銃や刀の効かないあの化け物を倒す為に」  
那賀須さんの目つきも一層真剣を見え、僕を見ている。

「私たちには君の力が必要だ。あの化け物たちから人々を護る為に力を貸して欲しい」

少しの沈黙、その後僕は那賀須さんを見据えて問いに答える。

「すみませんが数日だけ待つてはいただけませんか？……僕だけの問題ならすぐにでも那賀須さんたちに協力できるんですが兄さん……兄にこのことを隠すために少し細工して置かなければいけないので」

その問いに納得したのか、那賀須さんは小さく僕に頷く。

「そういうことでしたら構いません。何でしたら私たちからあなたのご兄弟に言い含めて置くこともできますが」

「あ、いえ。大丈夫です。こんな時の兄への対処は慣れていますので」

「わかりました。では都合が開きましたらこちらにお電話ください」  
そう言いながら、那賀須さんは僕に名刺を渡す。

「そろそろ時間も時間ですね。今日の所はこれくらいで終わりました」  
「よう」

説明も一段落を迎え、時間は既に夕方になろうとしていた。

彼ら（秋はその前にどこかへ消えてしまったけど）に見送られた後、僕は真っ直ぐ自宅への帰路についていた。

かえる道中、僕は先ほどまで話していた内容を考えていた。  
とてもじゃないが信じられるようなものではない。あの化け物やいつもみている小さな黒い影さえ見ていなければ僕は彼らを奇人の集まりだとも思っただろう。

しかし、僕は見てしまった。あの化け物の姿を。そして、それらと戦う少女たちの姿を。  
それを見てしまった以上、そして自分自身もあの化け物と戦ったという事実がある以上、信じるしかない。

不思議と戦うことに関しては恐怖を感じてはいなかった。  
なぜなのかは知らないが、僕に力を与えてくれる少女の声があるということがあるからかもしれない。

化け物さえ一瞬で消し炭にしてしまう少女の力、それが今は僕に協力を要請した彼らを守るための力になる。

電車を乗り継ぎ、自宅につくころには、夜は明け、いつもどおり周りには出勤のために駅に向かうサラリーマンであふれかえっていく。その中で、一人反対側に向かう制服姿の僕に不審の目をむけるのは当然といえば当然なのだろう。

その監視の目に耐え切り、自宅に自分。

なぜか、兄さんはどこにもいなかった。どこかに出かけてしまったのだろうか？

そんなことを考えながら、僕はゆっくりと息をつく。

唐突に疲れが体にのしかかる。  
眠気が頭にのしかかる。

（兄さんには悪いけど　ごめん、限界）

僕は倒れるように自室に入り、ベットに倒れこんだ。  
目を瞑るとすぐに暗闇が僕を包んでいった。

## 第8話：夢の彼女との再会・会話・驚愕（前書き）

仕事が忙しく、投稿ができなくなってきました。本当に申し訳ないです。

最低でも月1回投稿できるようがんばりますのでよろしくお願いします。



## 第8話：夢の彼女との再会・会話・驚愕

ふと気づいた時には、また小さな公園に、そして彼女がいた。

「…あ、来てくれたんですね」

僕の姿を確認すると、またふにやっとしたやわらかい笑顔を浮かべる彼女。

「こっちにベンチがありますから、いきましょう」

そういいながら彼女は、僕の手を握ってぐいぐいとひっぱっていく。そのやわらかい女の子の手に一瞬ドキッとしたのは心の中に隠しておく。

目的のベンチはすぐそばにあり、僕たちはそこに腰を下ろしていた。夢にしてはすごいリアルな質感、情景をぼんやりと眺め眺めながら僕は、あることを考えていた。

横にいる彼女の存在。彼女はいったい何者なのか？彼女は人間なのか？

ふとばれない程度の視線を彼女に向けてみる。

のんびりするのが好きなのか、明らかに和んで緩みきっている顔の彼女。

一見すれば普通の彼女。…しかしそんな彼女がああ光景を作り出したのだ。

月の見える夜、壊れた車と建造物、その中で燃え盛る黒い異形の獣たち。

「あの…、ちょっといいかな？」

少し逡巡したが、僕は彼女に問いかける。

「はい、何ですか？」

笑顔でこちらに答える彼女。僕は思い切って質問する。

「君は……… いったい、何者なんだ？」

- s i d e - ? ? ? ?

その一言を聞いた瞬間、私が浮かべていた笑顔が崩れる。どうにか戻そうとしても戻せない。唐突に八神さんがあわてだしている。それが意味しているもの…

自分でもわかる。今自分はとても、とってもつらそうな表情をしているだろう。

「… やっぱり、言わなければいけないことですよね。 あんなこと… 人にはできないことですから」

そういいながら、私は瞳を閉じる。自分の秘密を他者に打ち明ける勇気を持つために。

彼を疑念の一つなく信用できるように、心に言い聞かせる。

「わかりました…。 すべては、無理ですが… 話します。 聞いてくれますか？」

彼の目を開け、問いかける。 そんな私に彼は先ほどのあわてた感じがなくなり一転して真剣な表情を

浮かべ、ゆつくりと頷いてくれた。

「私の名前は、<sup>ユズモ</sup>柚子藻。…九尾の影族…なんです」

そう…八神さんに伝えた瞬間、私を包む世界が硬直する。彼はどうするだろう。

彼もまた他の人間同様、私を恐れるだろうか、それとも殺そうとする？

服の袖を手が白くなるほど強く握って私は彼の反応を待つ。

ほんの数瞬、彼はすぐに我に返ったように私を見てくる。

これから言われるかもしれない罵詈雑言や怯えの言葉に備えて私は彼の言葉を待つ。

しかし、彼からの最初の一言に驚きを隠せなかった。

「九尾…？あれ…もし九尾の影族なら名前は玉藻ではないの？」

恐れない。それどころか、何故か彼は問いかけてくる。

「え…？い、いえ、玉藻は私の母上の名前です。私は娘なんです…」

…何だろう、私が思い切って打ち明けたはずなのに帰ってきたのは母上のこと。

私の答えを聞いて彼は納得したように頷きを繰り返している。

「なんで？」

私を恐れないの…

思わず私はそう彼に問い掛けていた。  
私は彼らと同じ。影に生きる人外の化け物、異端の九尾の娘。  
だからこそ私はそう彼に問い掛ける。

「ん？何がだい？」

本当にわからないのか、それともただとぼけているのか彼は首をかしげる。

「だって

彼女らの話を聞いたのでしょー！？私は！

昨

日の影族と同じ。人じゃないもの。人外の化け物なんですよ！」  
自分自ら認めてしまうのは嫌だったが、それでも私は叫ばずにはいられなかった。

人外として生きた年月

それが私に与えたものは疑心。

人間を疑い続ける心を植え付けている。

こんなこといいたくない。でも彼の反応に疑いをもって叫んでしま  
う。この人も表面では怯えていなくても、  
心では怯えを隠せていないのではないか？  
そう思わずにはいられなかった。

沈黙が流れる。

やはり私の問い掛けに答えられないのか。彼もまた他の人間と同じ

だっ たんだ。

そんな落胆を覚え、俯いてしまう私。これなら彼に力を貸すのではなかった。

後悔と苦しみ、その両方が私にのしかかる。

それに耐えるため膝の上に置いた手が白くなる程強く握る。

「君は化け者じゃない」

唐突だった。

無言を貫いていた彼から発せられた言葉。

それを理解するまえに、

頭に軽い衝撃と優しい重みを感じた。彼の手だ。

「確かに君は影族と呼ばれる存在なんだろう。でも、僕は君を化け者だとは思わない。……だって」

そう話して彼は私の頭を優しく撫でながら言葉を紡ぐ。

「君は僕を助けてくれた。黒犬に殺されかけた時、アルゼが僕を庇って怪我をした時。君は僕に力をくれた。護るための力を」

私はゆっくりと顔を上げて、彼……陽一を見る。

彼は……優しく微笑んでいた。

「そしていつも僕のことを心配してくれた。そんな優しい君を化け者だなんて思わない」

「あ……」

その一言を聞いた瞬間、心で何かが弾けた。  
私の頬には自然と涙が流れる。

本来なら彼の言葉を疑うはずだが、なぜなのか今の私にはそれができなかった。

ただ涙があふれていく。それがどうしてなのかわからない。心の中がパニックを起こしてなにも考えられない。

そんな私を彼は私の頭をなでながら、静かに微笑んでいた。

そんな彼に、今は甘えよう。この色々な感情が交じり合った涙が止まるまでは……

- S a i d e o u t -

突然泣き出してしまった彼女……柚子藻を優しく見つめる陽一。

どうして泣き出してしまったのか。

彼女自身ですら把握していないその感情を彼は薄っすらだか知っていた。

それはつい最近まで自らも持っていたもの、受け取ったものだから。

彼女と彼が持っていたもの……それは孤独感、疎外感。

それが今、彼女の中で砕かれ、今までの反動が彼女にのしかかっているのだと。

自分にしか見えないものが見える陽一。

誰からも恐怖の対象と見られ、母と呼べる存在が死した後、一人きりで生きてきた柚子藻。

微妙な違いがあるかもしれないが、それでも共感できるものが二人の間にあるのは確かだろう。

だからこそ彼は彼女を優しく受け入れる。

自分自身、そうしてそれから解き放たれた。だから今度は自分が彼女を解き放とうと。

そして、何も知らなかった自分を支えてくれた彼女を今度は自分が支えよう。

そう彼は小さく、心の中で誓いを立てていた。

- S a i d e 陽 -

「もう……大丈夫なのか？」

しばらくして、落ち着いたのか目の辺りをくしゅくしゅとこすっている彼女を僕は心配してそんな言葉をかける。

「はい……大丈夫です。ごめんなさい、突然泣いてしまつて」  
少し目の下が赤くなっていたが、彼女は先ほどまでの笑顔を僕に向けてくれた。

その姿に、少しだけほつと胸をなでおろした。

「いいんだ。気にしてない」

そう短く伝えると、柚子藻は少し安心したように息をついていた。

「じゃあ、話がずれましたけど、話、続けましょう」

そう伝えると、柚子藻から笑みが消えて真剣さが滲み出していた。そんな彼女に僕は小さくうなずきを返す。

「僕から質問。二ついいかい？」

話が再開されて唐突に疑問が頭をよぎり、それを僕は口にした。

「はい。どうぞ」

「えつと一つ目だけど、影族には柚子藻みたいな妖怪……、言い方は悪いけどたくさんいるのか？」

二つ目はどうして、柚子藻は僕みたいな奴と一緒にいたのか？その



二つなんだけど」

一つ目に関しては、肯定ならんでもない事実が浮かび上がるから。影族の認識は、簡単な話現実存在する物体を元に擬態したもの。

もしも、それが違うというなら……仮想の生物までも擬態できるのなら、

身震いするが、それが事実なら強い怪物、例えば、RPGでおなじみのドラゴン。

そんな桁違いの影族が出てきてもおかしくないのだ。

二つ目は彼女の存在。僕は確かに幼少の頃から影族を見る事ができた。

しかし、ただそれだけだった。自分の家系はどこにでもいる平凡なもの。

自分自身、どこにでもいる一般人。

だからこそ、僕に彼女、影族であり、九尾という……多分影族でも高位の存在との接点など皆無なのだ。その疑問は正しいと思う。

……どこか自分を卑下しているようで悲しいが。

「わかりました。まず一つ目ですが、確かに影族には妖怪やモンスター。人類が考え出した仮想の生き物に

進化したものはいますよ。私の母上も私も元は人が考え出した生き物に進化した影族ですからね」

先ほどの悲観が嘘のように柚子藻は生き生きとした感じで話す。

……どうやら、僕の悪い予想は当たってしまったようだ。思わず頭

を抱えてしまう。

「あ、でも……そんなに多くないです。仮想の生き物の進化するなんて本当に稀のことなんです。

それに、影族では私たち仮想生物は……異端として疎まれているんです」

「異端？何でだよ？だって仮想生物なら普通の影族に比べたら能力が高いはずだろう？

それがどうして異端として扱われるんだ？」

「陽一さんが言った言葉が答えですよ」

そう答えた彼女に僕は首を傾げてしまう。

「能力が高すぎて、私たちは逆に影族からも脅威として見られているんです。それに高位に位置する影族のほとんどが人類を原型とした進化したもので構成されているからという理由があります」

「人類を元にしたから？」

「端的にいうと、彼ら人型影族は人間の感情というものを学んでしまったことが要因なんです。

人間の感情というものはとても素晴らしいものだと思います。私だってこうして陽一さんと会話して

笑っていられるのも人からそれを学んだおかげなんですから」

そういつて笑顔を向ける彼女。それに少しだけ僕は頬が熱くなってしまった。

「……でも、人の感情には怖いと思うものもあります。妬み、恨み。

そんなものまで影族は  
学んでしまったのです」

笑顔から暗い表情になった彼女。

「感情を知った多数の影族は私たちを妬み、恐怖し、異端として排除しようとしているんです。

だからその影響で私のような存在は少ないんです」

「でも、君みたいに能力がある存在なら」

「確かに、異端の中には排除に屈せず、同族殺しをして自分の確固たる勢力を築いたものもいます。

でも……私がいうのは何ですが、異端と表される影族は意外と穏健派が多いんです」

その言葉に僕も思わず驚いてしまった。

「お、穏健派？」

「はい。元々私たち、仮想生物は人間の想像によって生まれた存在ですからね。最低限の食事として

いただくくらいしか人間を襲わないんです。極力、人間の立ち入らない場所、又は人間に扮して生きているものがほとんどです」

「つまり、僕はドラゴンみたいな奴らとは戦わないですむということとか……」

彼女の話を聞いて安堵した。本当にRPGの連中と戦うことになったらどれだけ命があっただって足りない。

「ドラゴンさんですか？大丈夫ですよ。あの人たちは穏健派のリー

ダーですから」

「はあ……？は？」

唐突に告げられた事実の僕は驚愕する。ドラゴンが……穏健派！？

「ちなみに今のドラゴンさんのほとんどが、人間を喰わずに菜食主義になっています」

「……」

もう何も言つまい。あまりにギャップがありすぎるその光景を想像して何故か疲れてしまう。

「とにかく、ほとんどの異端と評される仮想生物の影族は人間に危害を加えることはありません」

そう断言した彼女。それに関しては僕は彼女を信じようと思う。

断言した彼女の顔は自信にみちあふれていたから。それに彼女が自分と同じ存在のことを話している時、とても優しい表情を見せていたから。

そんな表情のできる彼女を……柚子藻なら信じられる。信じよう。

新たに語られる人間には知ることのできない影族の裏の事情に耳を傾けながら、僕はそう心に思った。

「……話が長くなりましたね。次の質問に答えないと」

唐突に話を変える彼女。

「二つ目の質問。どうして私は陽一さんと一緒にいるのか、ですね」

僕は頷いて話の続きを促す。

「こちらは答えは簡単です」

そう簡単に答えた彼女の言葉に僕はこの日一番、いや……生きてきた中で一番の驚愕の事実を耳にすることになる。

「陽一さんが交通事故で瀕死の重傷を負った時に、私が憑依したんですよ」

驚きの連発の彼女との会話はまだまだ終わりそうにないようだ。

第8話：夢の彼女との再会・会話・驚愕（後書き）

少しずつ書いていますが、何か「こうしたらいいのでは？」などの指摘がありまして是非お願いします。完結できるようがんばりますのでこれからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5237g/>

---

影法師

2010年10月9日06時34分発行